

Title	さまよえるダヴィデの星 : 書き換えられた「この日をつかめ」
Author(s)	片淵, 悦久
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 39 P.1-P.18
Issue Date	2005-12
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/10778
DOI	
rights	本文データはCiNiiから複製したものである

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

さまよえるダヴィデの星

—書き換えられた『この日をつかめ』—

片 淵 悦 久

ソール・ペローの『この日をつかめ』（一九五六年）は、主人公トミー・ウィルヘルムの唐突な号泣場面で終わる。職を失い、妻子とも別居し、父親の暮らすホテルでその日暮らしを続けるウィルヘルムは、タムキン博士のすすめのまま、残り少ない有り金をすべて先物市場への投資に費やしてしまう。相場の下落でその金を失いながら、なお優柔不断な彼に対し、父のアドラーは援助の拒絶と勸告を告げ、妻は二人の子供の養育費を要求し、恋人は愛想を尽かす。頼みの綱のタムキンも姿をくらましてしまう。窮状きわまつたウィルヘルムは、相場につき込んだ資金だけでなく取り戻そうと、タムキンを追ってニューヨークの雑踏をさまよひ、葬儀場へと迷いこむ。そして見ず知らずの男の棺にすがり、人目もはばからず涙を流す。これが結末に至る展開である。

ところで、この棺の男はユダヤ人であり、葬儀もユダヤ式だとする説がある。葬儀場を「ユダヤ教礼拝堂」だと断言する向きもある（S・リリアン・クレイマー 一六四）。その根拠となるのが、この場面でのダヴィデの星への言及である。「ステンドグラスの白色は真珠貝のように光り、ダヴィデの星の青色はピロードのリボンのようだ」（一

一六、強調付加)。(原文では、“The white of the stained glass was like mother-of-pearl, the blue of the Star of David like velvet ribbon.”) ステンドグラスにダヴィデの星が描かれているようにも、あるいはユダヤ教の葬儀の慣習にしたがって、六星形模様で飾られた掛け布に棺が覆われているようにも読める。⁽¹⁾ただし、これはあくまで初版に限っての話である。実は一九七五年にこの小説は再版されたのだが、その際、散見される単純な植字上の訂正はともかく、右の引用部分に書き換えが行なわれていたのである。該当箇所を引用してみよう。「大きな星形をした青色が流れるような美しさ、ピロッドのリボンのようだ」(一六、強調付加)。原文で確認すれば、前掲“mother-of-pearl”以下が、“with the blue of a great star fluid, like velvet ribbon”となり、ダヴィデの星の存在が微妙になっていることがわかる。

長く取り上げられなかったこの箇所の書き換えを、ようやく問題にする研究者が現れた。「この日をつかめ」新論文集」の序文でマイケル・P・クレイマーは、「ダヴィデの星の削除により、「ペロー」は」(無意識のうちに、あるいはそうでないかもしれないが)民族的な差異への告別を果たした」という見解を示している(一八)。また、同じ論集の中で、エミリー・ミラー・バティックは次のように主張する。「棺に納められた」この人物以外にも、結末部の葬儀場面で埋葬されようとしているものがある。それは、従来考えられてきたように、人の苦しみ、つまりトミ・ウィルヘルムの個人的苦難や、同胞ユダヤ人民族の受難とは異なるものである。むしろ、この小説はユダヤ性そのものを永久の眠りにつかせようとしているのではないか」(バティック 九四)⁽²⁾。しかし、「ダヴィデの星」を「巨大な星模様」に言い換えたことを、ペロー小説におけるユダヤ性の否定と結論づけるだけでは十分とは思われない。ペローが加えた修正は原文の語数や行数の変更を伴わないわずかなものだが、ユダヤの象徴への明確な言及を避け

たことは、ユダヤ系作家による改訂として看過すべきではない。何よりも、なぜベローはこうした変更を、出版後二十年を経過した時点で施したのだろうか。残念ながら、この点を『最新論集』の執筆者たちは論じ尽くしていない。そこで本論では、この書き換えをふまえた物語言語の全体像を見直すことを目指したい。その際に重要なポイントとして分析に絡めたいのが、ユダヤ系の作中人物たちの存在意義と主人公の別名の問題である。

アメリカのユダヤ人

ベローの他作品の多くと同じく、『この日をつかめ』の主要な登場人物はユダヤ人である。ウイルヘルムが暮らすグロリアーナ・ホテルのロビー売店係ルービン、同ホテルの住人パウルズ氏、商品取引所仲間のラパポート氏、あるいはかつてウイルヘルムのハリウッド行きにかかわったタレント・スカウトのモリス・ウェニス。だが、主人公との関係においてもっとも重要なユダヤ系作中人物は、ウイルヘルムの実父で名声の誉れ高き元内科医のアドラー博士と、心理学者を自称しつつ商品相場にも精通し、言葉巧みにウイルヘルムを先物取引へと誘うタムキン博士であることは言うまでもない。

ハナ・ワースルネシャヤーは、ウイルヘルムとアドラー／タムキンの関係を次のように述べている。「トミー・ウイルヘルムには父親が二人いるようなものだ。それぞれがユダヤ人の歴史の具象的存在、すなわち理性的だが堅苦ししいドイツ系ユダヤ人（アドラー）、そして迷信深く、熱烈で衝動的な東欧系ユダヤ人（タムキン）を表象している」（ワースルネシャヤー 二三三）⁽³⁾。やや紋切型ではあるが、アドラーとタムキンが系統的には同じアシケナージーム（中東欧系ユダヤ人）でありながら物語上は対照的な存在として描き分けられている点を看破するの射た洞察である。

それぞれの出自的な背景の違いは、アドラーとタムキンの存在に単なる性格設定以上の説得力を与え、ウィルヘルムを中心とする物語に広がりを与えている。ここでは、この二人の博士とウィルヘルムとの関係に論点を絞り、この小説のユダヤ性の問題を考えてみたい。

まずアドラーについてだが、以下の引用から、彼の出自に関しておおまかには知ることができる。

彼「ウィルヘルム」は言った。「母さんとマーガレット「ウィルヘルムの別居中の妻」を較べてはだめだよ。それから父さんとぼくを較べることも。だって父さんは成功者じゃないか。成功は、成功。だが、ぼくは成功になど縁はない。」

博士の年老いた顔から穏やかさが完全に姿を消し、厳格で怒りに満ちた表情へと変わった。小さな胸が赤と黒の縞シャツの下で激しく盛り上がった。そうして彼はこう言った。「そうだ。がんばって仕事をしてきたおかげだ。私は自己に耽溺して、怠惰に時間を過ごすタイプではなかった。私の親父はウィリアムズバーグで衣類販売をやっていた。取るに足らない存在だったがね。わかるかね。私には自分に与えられたチャンスが無駄にすることなどできない相談だったのだよ。」(五〇)

物語の現在は作品出版と同じ一九五〇年代中葉のある一日と仮定される。そこから逆算すれば、七十歳代なかばの年齢設定であるアドラーは、一八八〇年代のはじめの生まれとわかる。この時期は、一八三〇年代から本格化し半世紀ほど続いたドイツ系ユダヤ移民の最終時期とほぼ符合する。主流アメリカ社会への参入と成功へ向けた貪欲な執念、たゆみない向上心と自負心に満ちみちたアドラー博士は、移民の境遇を背負い続けた父親を乗り越え、社会

的な上昇のみならず、ついには医師として名声も富も得た移民第二世代と見てまちがいない。

一方、タムキンの出自については謎が多い。年齢が五十代だということ、そして父親はオペラ歌手だったというタムキン自身のほら話的な発言以外は、その私生活が詳細に描出されることがないからだ。しかし、彼の場合も、年齢設定から見て、おそらく十九世紀終わりから二十世紀初めを中心とする東欧移民もしくはアメリカ生まれの同第二世代であろう。タムキンの話からは、アドラーのような直線的な向上とは異なる形で成功をつかんだ経緯が浮かび上がってくる。まずもって、荒唐無稽ともいえる職歴の豊富さには驚くばかりである。エジプト王家に仕え、テレビ分野の技術顧問としてメディア業界に携わり、精神療養所の所長を務めたこともあるという。また奇妙な発明品の数々——トラック運転手のための居眠り防止用の目覚まし器具、核戦争のときにはハドソン川の底を歩いて渡れるという潜水服など——にも圧倒される。だが、多彩な才能を駆使して生き延びる姿は、何やら伝統的ユダヤ人キャラクターであるルフトメンチ (Lufmenschi 夢想家、放浪者の意もあり) にも重なるような面を持ち合わせている。⁽⁴⁾ いずれにせよ、奇矯な言動と怪しげな人生遍歴にもかかわらず、タムキンもまた、アドラーとは対照的ではあるが、少なくとも同じ高級ホテル暮らしが可能な以上は、社会的成功者と認めざるをえない。

しかし問題は、アドラーもタムキンも、いや極論すればこの小説に登場するすべてのユダヤ人たちは、民族的な自己意識を強く持つてはいない、つまり信仰や生活様式の上でもはやユダヤの伝統にとらわれていないことである。それどころか、彼らの自己確立の拠り所は、あくまでアメリカ人としてのそれではない。たしかに、親の世代の移民体験も知る第二世代の場合、みずからの民族的背景に対するアンビヴァレントな感情にとらわれたいためには、民族的な背景をあえて隠蔽して、アメリカ人になることを渴望する意識を保持しなければならない。そうでなければ

ばアイデンティティの二重拘束状態を克服できないからだ。

このように自己実現者のアドラーやタムキンが、ユダヤ人ならぬアメリカ人として物語世界にその姿を誇示すればするほど、挫折者ウイルヘルムの自己疎外的、あるいはいかにもユダヤのシュレミール（愚か者）的な人物像が見えてくるのは皮肉なことだ。おもしろいのは、場合によって彼自身が、父親を越えられないみずからの姿を自己照射的に認めてさえいることである。たとえば、第四章の冒頭部分でウイルヘルムがのしり語をたたみかけ激しい自己嫌悪を表出する内なる言説——「馬鹿！ 間抜け！ イノシシ野郎！ 愚かな意地っ張り！ 奴隷！ 汚らしい、のたうち回るカバノ」（五五）——にもそれが端的に表れている。

こうしたウイルヘルムの自己嫌悪にも似た感情を、みずからのユダヤ人としてのアイデンティティ確認の裏返しであると読めば話は早い。自己疎外の果てにたどり着くのが、一切の虚飾を取り除いた本来的な自己だとすれば、それはそれでわかりやすい物語展開であろう。しかし、ユダヤ性の後退した改訂版においても同じ結末が想定できるだろうか。この問題をさらに考える上で、考慮に入れなければならないポイントが物語にはある。ウイルヘルムの別名とそれをめぐる一連のエピソードのことである。

別名と自己

『この日をつかめ』では、主人公の名前と自己確認の関係が重要なモチーフとなっている。ウイルヘルムにはいくつかの名前があり、本名はウイルヘルム・アドラーだが、物語中ではトミー・ウイルヘルムという別名を名乗っている。彼が名を変えたのは、物語の現在から二十年以上さかのぼる一九三〇年代はじめのこと。当時二十歳の彼

は、タレント・スカウトのウェニスに映画スターの素質を見込まれたと勘違いし——実際、ウイルヘルムの軽率な判断であったと物語はほのめかす——なかば独断でハリウッドへと赴いた。しかし、七年間にわたる徒勞の末、結局は銀幕での成功を断念したのだが、そのときの夢と挫折の名残が彼の別名なのである。

カリフォルニアで、彼はトミー・ウイルヘルムになった。アドラー博士はこの改名を認めようとはしなかった。今でも彼はまだ息子のことをウイルキーと呼んでいた。四十年以上も前にそうしていたように。まあ仕方がないか。「……」本当のところ、人が自分の意志で変えられるものはほんとうに少ない。肺や神経や体格や氣質を變えることなどできない。そういうものは自分ではどうにもならないのだ。若くて力もあり押しも強く、ものごとくに満足などできないと言える時分なら、自由を主張するために世の流れを変えてみたいと思うものだ。だが政府の打倒などできないし、違う人間に生まれ変わることもできない。ささやかながら将来を展望したり、たぶん予想ぐらいならできらう。ただ、そういうったものも本質的には変更はできない。それでもなお、何らかの姿勢を示すべく、自分はトミー・ウイルヘルムになるのだ。(二四—二五)

ウイルヘルムはアドラー姓を捨て、本来の固有名を姓に転用した上で、新たな固有名を与えている⁽⁵⁾。だが、改名によつて表明された自己実現の意志は現実の厳しさを前にその効力を失う。彼は、「一度としてトミーであることを実感したことはなかった。いつも心の中ではウイルキーのままだった「……」ウイルキーの名はどうしても逃れることのできない自分自身であった」(二五)。トミーとは、真の自己を隠蔽する仮面である。タムキンはその仮面を「見せかけの魂」と言う(七〇)。ウイルキーこそがほんものの自分——同様にタムキンはそれを「真実の魂」と言う——

を表す名ではないかというウイルヘルムの考えは正しい。「トミー」として成功しなくて、あるいはよかつたのかもしれない。トミーが成功したとしても、ほんものの成功とは言えないだろうから。自分自身ではなく、トミーが、ウイルキーから生まれながらの権利をだましとつて成功したような、後味の悪い思いがしたことだろう」(二二五)。ちなみにタムキンはウイルヘルムをトミーと呼ぶ。トミーがウイルヘルムにとつての「生まれながらの」本来的な自己を指し示すことはない。なにしろそれは映画という虚構の世界に自己実現の夢を託し挫折した俳優志望者の仮の名前でしかないのだから。改名は自己実現の夢と戯れるはかない願望にすぎない。

だが、より重要なことは、別の箇所でもウイルヘルムはウイルキーさえほんものではないと言っていることである。「トミーの中にウイルヘルムは見せかけのものを見た。いや、ウイルキーですら自分ではないかもしれない。もしかするとほとくの真実の魂とは、老いた祖父がほくを呼ぶときに使ったヴェルヴェルという名前なのではないだろうか」(七二)。挫折の象徴であるトミーやウイルキーとちがひ、ヴェルヴェルだけが許容される名、つまり「真実の魂」であるとウイルヘルムが信じて疑わないのは、その名がただひとつ、その後彼が幾度も経験することになった失敗とは無関係の、純粹無垢な幼少期のそれであるからに尽きる。

しかし、そもそも「真実の魂」と呼べる名前などありえるのだろうか。本来、名前は自己と他者を識別する社会的な記号であり、自己を形成する一部でしかない。ウイルヘルムは、成功の夢を改名に託し、自分の人生はみずからが選びとることを社会的な自立の証であると信じた。もちろん、そんなことは実現不可能な幻想にすぎないと物語の現在の時点で彼は気づいているが、一度ならずつまずいた人生に修正を施す術を見出せずにいる。ウイルヘルムはこの点について以下のように述懐するが、そこに漂う感情はもはや無力な諦念でしかない。

名前を変えたのは間違いだった。そのことは自分でも率直に認めるつもりだ。だがもうその過ちは取り返しよ
うがない。それなのになぜ親父は、しきりに昔の罪のことを思い出させようとするのか？　もう遅すぎるのだ。
そんなことしたって、罪を犯した哀れなあの日へと立ち戻ることになるだけだ。しかも、その日が今どこにあ
るといふのだ？　そんなものをつくの昔になくなってしまったではないか。それに、こうした屈辱的な思い出
はいつたい誰のものなのか？　それはほくのものであつて、親父のものではない。(二五—二六)

改名がウィルヘルムにもたらした不幸は、むしろ挫折のはじまりであつたことだ。新たな名前を獲得することは自
己の主体性を確立する行為となるどころか、「見せかけの魂」(七〇)を複製することにはかならない。

ところで、エミリー・ミラー・バディックはウィルヘルムの名前の移り変わりについて、トミー、ウィルキー、
ヴェルヴェルと逆にたどることは、「アメリカへの同化からヨーロッパへの同化、そしてユダヤ人固有の同化形態と
してのユダヤ性へと」いう具合に、ユダヤ人の歴史をさかのぼることと同じだと述べている(バディック 一〇
〇)。トミーがアメリカのユダヤ人、ウィルヘルム(あるいはウィルキー)がヨーロッパのユダヤ人、そしてヴェル
ヴェルがユダヤ人の本質的アイデンティティを表象すると考えるならば、幼少時の愛称への郷愁は自己の起源的探
求の願望そのものだとわかつていこう。しかし、幼名への固執が「みずからのユダヤ的起源への回帰であ
つたとしても、あくまでその名は子供のころの名にすぎない」(ハイランド 四四 強調付加)。ヴェルヴェルとい
う名への愛着は、過去に失われ、すでに存在しない名前、すなわち記号化された無垢なる自己の残像を求めたもの
にすぎない。

したがって、ウィルヘルムの反動的ときえ言える起源遡及は、古い自己の更新ではなく、それ自体愛称であるトミーが、「皮肉にも」……子供じみた依存と抑制された成長をほのめかす（パウソン 七〇）ように、無邪気な、そして社会的責任を伴わない子供時代への逆戻りに等しい。そのような精神的な退行傾向は、ユダヤ人としての名（ウィルキー）へのアンビヴァレントで反動的な執着——父だけでなく、亡き母親も彼をそう呼んでいた——を生むだけであり、非現実的な無垢への逃避にしかつながらない。それでもなお、アメリカのユダヤ人との訣別によりユダヤ人としての自己を知るに至ることが物語の避けがたい流れであるとすれば、ウィルヘルムの絶望的な行動が、「言葉も、理性も、論理の一貫性も超えて」（一一七）、起源回帰的な自己確認に落ち着くことは妥当な結末のように思われてならない。しかし、それならばあの葬儀はやはりユダヤ人のものであるべきではないだろうか。にもかかわらず、なぜ「ダヴィデの星」は書き換えられなければならないか。のだから。

星の行方

ウィルヘルムの自己探求に焦点を定めるとき、われわれはその点に関連して、結末場面に興味深い叙述があることに気がつく。それは棺と対面したウィルヘルムが泣き出した後の場面なのだが、参列者のひとり、号泣する彼の様子を見て、故人の兄弟ではないかといぶかしむ箇所だ。それに対し別の参列者は、「昼と夜ほども」似ていないと返答する（一一八）。まったくの他人同士が似ているはずもないのだが、このやりとりによって、もし棺の男がユダヤ人ならば、この人物とまったく容貌の異なるウィルヘルムが、あからさまにユダヤ人ではないことを印象づけられているようにも読める。だが、ユダヤ人の証であるダヴィデの星の存在がいまいになれば、ウィルヘルムの

民族的系譜を問うこと自体が意味をなさなくなる。もとよりこの葬儀場はユダヤ教の施設ではなく、キリスト教のチャペルあたりを借りた可能性さえある。つまり、借り物の礼拝堂に置かれたダヴィデの星は、そこがユダヤ人の葬儀であることを示す記号的機能しか果たしてはいない。もちろんそのような状況は、多文化社会アメリカなら十分にありえることであり、むしろある意味でアメリカ社会に同化したユダヤ系の人々にふさわしい民族的伝統との折り合いのつけ方ではないだろうか。

だとすれば、ダヴィデの星があいまいな表現に書き換えられて正解だったのではないだろうか。それは、この小説の描くアメリカのユダヤ人、とりわけウイルヘルムとユダヤの伝統との希薄なかかわりにとつて、ふさわしい物語の決着のつけ方だと思われるからだ。何しろ安息日（ユダヤ教徒なら土曜日）にブルックリン・ドジャーズの野球観戦をし、母親の墓参もドジャーズが遠征中のみ⁽⁶⁾、贖罪の日^{ヨム・キプー}さえ忘れかけているウイルヘルムのことだ。とてもユダヤ人らしいとは言えない彼が、即席で仕上げられたかもしれないユダヤ人の葬儀に居合わせたからといって、突如ユダヤ人の自己に目覚めるというのも現実味を欠く展開であろう。もちろん、どれほどユダヤ的でなろうと、ウイルヘルムが血統的にユダヤ人でなくなることはない。そんな彼に似つかわしいのは、ユダヤ性のあいまいなその場の雰囲気であり、それこそ彼の自己探求の行方そのものを暗示する適切な場面選択であると断言できる。

こうした読みは、ユダヤ教関連の豊富な知識にもとづき、聖書やハシド派的なユダヤ教信仰への姿勢を作中に読み込むS・リリアン・クレイマーやL・H・ゴールドマン、またユダヤ教の信仰を含むユダヤ人の伝統の影響が、ベロ小説の中でも『この日をつかめ』にもっともはつきり読みとれると喝破するゲイ・マコーラム・シモンズの主張とは相容れない。だがそうした先行する議論は、ユダヤ人の葬儀場が借り物である可能性と、そこに何の因果関係

もなく飛び込むウィルヘルムにユダヤの伝統に寄せる意識が決定的に欠如していることを見落としている。たとえば、グヴィデの星がまったく言及されなかったとしても、ウィルヘルムの自己回復を暗示する号泣場面そのものに大きな影響は生じない。一方、偶然たどり着く場所が明らかにユダヤ的であったならば、本質主義的で儀式的にさえ映る自己確認のあり方が強調されすぎるくらいがある。それならばグヴィデの星に余分な物語を語らせるよりも、むしろその場のユダヤ的雰囲気調節し、「心が究極的に必要とするもの」(一一八)を求める主人公の物語にたしかに普遍性を与える方が自然な自己探求物語の展開と結末になるはずである。

ここで、冒頭にあげたクレイマーやバディックの議論をいまいちど思い出してみよう。なるほど、グヴィデの星の消失がユダヤ的アイデンティティ確認や信仰との訣別を表すという彼らの主張は誤読ではない。だが、六星形模様がいまいになつたことによりユダヤ的な特殊性が排除され、普遍的な物語が現出したと読むのは正確でない。そうではなくて、不用意なユダヤ性の強調を避けつつ、微妙なユダヤ的雰囲気は残すという巧みな物語補完作業をペローは行なつたと解釈すればどうだろうか。もちろん、こうした物語言説上の周到な修辭的効果によって、われわれは初版の「グヴィデの星」の残像を改訂版の「大きな星形をした青色」に重ねることを暗に求められているとも言える。つまり、表立って姿を現さずとも、やはりその星はいまだそこにあると解釈するように。アメリカのユダヤ人であることが、本来的にユダヤ人でなくなつたことと同義ではないように、グヴィデの星は姿を変えて物語に残存し、その存在感を物語に修辭的な形でとどめているのである。同じように、この小説におけるユダヤ性も隠蔽されたように見えて、実は再刻印されているのかもしれない。ペローによる物語再編集の妙はその点にあることを見逃してはならない。

かくしてわれわれは、ユダヤ的伝統に関心の薄いアメリカの物語に、ユダヤ的なエスニシティとアメリカニズムとが交錯する地点を見出す。ユダヤ人の時代とも呼ばれるアメリカ五〇年代を切り取る物語は、記号化されたダヴィデの星の修辭的なさすらいとともに、ユダヤ人がアメリカ人になるその瞬間を映し出しながら、同時にまたユダヤ人のアイデンティティのありように対して肯定的な眼差しを向けようとしている。

しかし、さらに一步ふみこんだ読みの可能性も考えられる。その手がかりとなるのが、この小説の再版時期とその翌年にあたるノーベル賞受賞者選考の時期との微妙な関係である。実はペロー受賞の動きは、そのしばらく前からあったとされるが、選考委員の中には、「ペローの関心の狭さ、いきおい世界的な活躍を望んでいないのではないかとということに対する懸念」を表明する向きもあったと言う(アトラス 四五四)。具体的に何がペロー小説の狭さを決めるのか判然としないが、それでもこうした見解は、ペローをユダヤ系の作家に限定しようとする評価(あるいは偏見)と無関係ではない。そうした制限的な評価のありかたに敏感であったとすれば、ユダヤ系のレッテルを拒絶し、アメリカ作家であることを重要視してきたペローが、代表作『この日をつかめ』から明らかにユダヤ的な表出を避け、結果として物語に普遍性を持たせる編集作業をみずから手がけたとしても不思議ではない。

いずれにせよ、七五年改訂版が、ウィルヘルムをはじめとするユダヤ人たちの自己確認の問題にとどまらず、小説家としてのペロー自身の自己意識の問題ともまた複雑に絡みあった結果生まれた可能性は限りなく大きい。『この日をつかめ』はアメリカ作家としての自己実現を目指すユダヤ系作家ペローによる巧みな物語戦略を典型的に示している。だが、もちろんその修辭的な作用を物語言説全体に及ぼした書き換え自体に、アメリカのユダヤ人を描くこととユダヤ人のアイデンティティの本質を掘り下げることとの間に生じる絶えざるゆれが内在している点は看

過できない。もともとユダヤ性を全面的には志向してはいなかったかもしれないこの小説が、ことによると作者の想定を超えて、ユダヤ性に対するこだわりを印象づける物語となった可能性も決して考えられないわけではない。

注

* 『この日をつかめ』からの引用は拙訳によるが、部分的には以下の既訳を参照した。『その日をつかめ』宮本陽吉訳 集英社 一九九〇年、『この日をつかめ』大浦暁生訳 新潮社 一九九三年。

(1) ユダヤ人の葬儀の慣習については、グロス(二三〇)を参考にした。

(2) この書き換えに本格的に注目したのは、おそらくクレイマーの論集が最初であろう。もちろん、七五年の改訂以前に、五六年の初版自体が『パーティザン・レビュー』掲載版からの改訂であることを忘れてはならない。そのあたりを含めたベロー小説の草稿研究としてはフックスのものが詳細である。ただし、フックスは七五年版を考慮していない。ワースIIネシャー(三三〇)は、結末の書き換えを雑誌版から小説初版への改訂ととらえているが、誤りである。なお、岩山(二三六)には七五年改訂版への言及があることを付け加えておく。

(3) たとえば、エイブラハム・カーハンの『デイヴィッド・レヴィンスキーの出世』(一九一七年)には、服飾業界におけるドイツ系/東欧系ユダヤ人の対立の様子が描かれている。この件をめぐる歴史的背景は、アーヴィング・ハウ、『われらの父たちの世界』、およびハワード・M. サシャー、『アメリカのユダヤ人史』に詳しい。

(4) 「実体のない計画に没頭する」(ピンスカー 一三三)という定義もある。

(5) ゴールドマン(七八、八一)を参照。トミーはトマス(トム)の愛称であり、トムはイディッシュ語の「タム」(Tam)。「愚者」のほかに《無垢で》、《正直で》、《純粋な》、つまり《だまされやすい人》。「ワースIIネシャー 二二六」にも通じる。ベロー自身がイディッシュ語から英訳した、アイザック・バシエヴィス・シンガーの「愚か者ギンペル」——イディッシュ語の原題は、Gimpl tan——との類推で、ウィルヘルムがトミーを名乗ることは、愚者、つまりシユレミール (schlemiel) 的な自己の無意識の受け入れであるともとれる。S. リリアン・クレイマーは、ウィル

ヘルムをシュレミール／ハシド（ユダヤ敬虔主義信奉者）、対するタムキンをシュノーラ（職業物乞い）／ツアディーク（ハシド派の霊的指導者）にとらえ、そこから物語に反ハシディズム的諷刺を読み込む。ウィルヘルムのシュレミール性についてはシャメツキーおよびピンスカー、イティッシュ語の語義についてはロステンを参照。ただし、ピンスカーも主張するように、身に降りかかる災難を予測できないのがシュレミールの本質だが、自分の選んだ人生に予想される「リスクを十分に承知」しながら、「幾度となく拒んできた道をきまって選んでしまふ」（二三）ウィルヘルムは、厳密にはシュレミールとは言えない。詳細は、ピンスカー（二三）を見よ。

(6) この部分にも改訂が施され、初版ではウィルヘルムが母の墓を訪れるのは「この前の土曜日」だが、改訂版では「日曜日」に変更されている（二三）。伝統的には安息日の活動は控えるべきだろうが、墓参の場合は例外だろう。いずれにせよ初版の叙述では、ウィルヘルムの亡き母親への思いと正統派の信仰とが結びつく可能性がある。それゆえ書き換えられた可能性もある。

引用文献

- Atlas, James. *Bellow: A Biography*. New York: Random, 2000.
- Bellow, Saul. *Seize the Day with Three Short Stories and a One-Act Play*. New York: Viking, 1956.
- _____. *Seize the Day*. New York: Penguin, 1984.
- Bouson, J. Brooks. *The Emphatic Reader: A Study of the Narcissistic Character and the Drama of the Self*. Amherst: UMP, 1989.
- Budick, Emily Miller. "Yizkor for Six Million: Mourning the Death of Civilization in Saul Bellow's *Seize the Day*." *Kramer* 93-109.
- Chametzky, Jules. "Death and the Post-Modern Hero/Schlemiel: An Essay on *Seize the Day*." *Kramer* 111-23.
- Cronin, Gloria and Gerhard Bach, eds. *Small Planets: Saul Bellow and the Art of Short Fiction*. East Lansing: Michigan State UP, 2000.

- Fuchs, Daniel. *Saul Bellow: Vision and Revision*. Durham: Duke UP, 1984.
- Goldman, L. H. *Saul Bellow's Moral Vision: A Study of the Jewish Experience*. New York: Irvington, 1983.
- Gross, David C. *How to Be Jewish*. New York: Hippocrene, 1989.
- Howe, Irving. *World of Our Fathers: The Journey of the East European Jews to America and the Life They Found and Made*. New York: Harcourt, 1976.
- Hyland, Peter. *Saul Bellow*. London: Macmillan, 1992.
- 柴田 大次郎(編著) 『ソール・ベロー』東京 山口書店 一九八二年。
- Kramer Michael P., ed. *New Essays on Seize the Day*. Cambridge: Cambridge UP, 1998.
- _____. "The Vanishing Jew: On Teaching Bellow's *Seize the Day* as Ethnic Fiction." Kramer 1-24.
- Kremer, S. Lillian. "Seize the Day: Intimations of Anti-Hasidic Satire." *Modern Jewish Studies* 4.4 (1982): 32-40.
- Rpt. in Cronin and Bach 157-67.
- Rosten, Leo. *The New Joys of Yiddish*. New York: Crown, 2001.
- Pinsker, Sanford. *The Schlemiel as Metaphor: Studies in Yiddish and American Jewish Fiction*. Rev. and enl. ed. Carbondale: Southern Illinois UP, 1991.
- Sachar, Howard M. *A History of the Jews in America*. New York: Knopf, 1992.
- Simmons, Gaye McCollum. "Atonement in Bellow's *Seize the Day*." *Saul Bellow Journal* 11.2 & 12.1 (1993): 30-53.
- Rpt. in Cronin and Bach 169-87.
- Wirth-Nesher, Hana. "'Who's He When He's at Home?': Saul Bellow's Translations." Kramer 25-41.

(文学研究科助教授)

SUMMARY

**The Wandering Star of David:
A Rewritten Ending of *Seize the Day***

Nobuhisa KATAFUCHI

In 1975, Saul Bellow reissued *Seize the Day* (originally published in 1956). The revised version altered the description toward the ending of the narrative: a direct reference to "the Star of David" in the former edition is replaced by an ambiguous expression, "a great star fluid."

The novella seems to have become less Jewish by the deletion of such an overtly Jewish symbol. This is consistent with the basic setting of the narrative, in which the Jewish characters are no longer the tradition-minded Jews saturated with old immigrant experiences, but are those who have realized the American dream of success.

The same situation seems to have held for Wilhelm, who changed his name in his youth from Wilhelm Adler to a more American Tommy Wilhelm. He failed, however, to seize the day of his success as an actor in Hollywood, and he remains dependent on his father both mentally and financially, as well as unable to take responsibility for his own family. The whole story seems to foreground the possibility of change, drawing attention to the processes of the acculturation of the American Jews, but in fact it describes its impossibility on the part of the protagonist, contemplating, in particular, on the inevitability of his predetermined Jewish identity.

The reason why Bellow made his novella apparently non-Jewish is that the ending of the narrative emphasizes that Wilhelm might be spiritually reborn as an American Jew, implying that he will never lose his Jewish identity. We may reasonably conclude that Bellow's deliberate attempt to efface the Jewish atmosphere of the narrative is to indicate that ethnic identity could not be cancelled without being reinscribed. Likewise, the novella should also be understood as the author's self-realization not only as an American but as a Jewish writer, whose "great star fluid" universalizes the story without surrendering its Jewishness.

キーワード：ソール・ベロー，ユダヤ系アメリカ作家，ユダヤ人のアイデンティティ，自己実現，ユダヤ性と普遍性